

日本文学研究資料叢書

中野重治・宮本百合子

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

# 野重治・宮本百合子

日本文学研究資料刊行会編

有精堂

日本文学研究資料叢書

中野重治・宮本百合子

---

---

定價 2,800 円

昭和 56 年 7 月 1 日 発行

編者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山崎 誠

---

101 東京都千代田区神田神保町 1-39

発行所 有精堂出版株式会社

電話 03 (291) 1521~3 番

振替口座 東京 9-40684

---

---

3393-550674-8610

### 『日本文学研究資料叢書』刊行に際して

日本文学の研究は、戦後三十数年を経て、再検討と新しい方法への模索が試みられ、転換期にあると言われております。そうした状況のなかで、未来に開かれた日本文学研究を形成して行くためには、当然のことですが、従来の研究業績を正しく評価し、その基礎の上に新しい成果を積み重ねることを志向しなければなりません。

本叢書はそうした要請に答えて、日本文学研究の未来に賭けられた可能性のために刊行されたものです。今や、国文学界も、マス・コミュニケーションの時代は避けられず、多数、多種の情報が、錯綜し、混乱して伝達され、その氾濫は真の学問的交流を阻害するようになっていようにさえ見えます。尨大な著作・雑誌・紀要等々が刊行され、それらのうちには、入手しようとしても、往々図書館にさえ具備されていないといったように、種々の困難が、そうした錯綜の上に重なり、学問の発展を阻害する壁として立ち塞がっているのが現状です。こうした時代の中で、真に学問的なコミュニケーションを確保するために、本叢書は有効的な役割を果たす決意で刊行されたものです。

本叢書は、既発表の研究論文のなかから、従来の研究に大きな意味を持っているもの、あるいは新しい可能性を開拓しているものなどを選択し、各時代・ジャンル・作家・作品ごとに論集として編集し、各研究分野の、基礎的・基本的な情報を、出来る限り有効的に提供することを目標としたものです。また現代の日本文学研究の動向が、本叢書によって総覧でき、今後の進路を導く羅針盤でありたいと希望しております。

日本文学の研究者、特に若い未来にのみ存在する研究者に、本叢書の趣旨が期待され、支援され、永続的な事業として継続される力を与えて下さるよう願ってやみません。

日本文学研究資料刊行会

目次

中野重治

芸術に関する走り書	小野松二	一
中野重治の「鉄の話」に就いて	中谷孝雄	五
中野重治論	亀井勝一郎	八
『空想家とシナリオ』評	高沖陽造	三
中野重治論	伊藤信吉	六
「昭和名作選集」21『歌のわかれ』解説	窪川鶴次郎	三
青春の文学	平野謙	七
なかの・しげはる論	荒正人	三
中野重治	磯貝英夫	四
『むらぎも』論	亀井秀雄	五
中野重治の父祖―転向論補遺―	満田郁夫	六
中野重治における詩の応答構造―「裸像」の作品から―	亀井雅司	六
中野重治とハイネ	森良文	七

中野重治における短歌の位置……………小林 広 一…三

中野重治と『日本浪漫派』―『歌のわかれ』論(下)―……………水本精一郎…二〇

〔座談会〕『甲乙丙丁』を語る……………本多 秋 五…二三

「文学的立場」同人

宮本百合子

大正六年文芸界の作品……………大 杉 栄…三

中条百合子氏の印象―作品を透して見る―……………加能作次郎…二五

新らしくて旧い対立……………青野 季 吉…二五

―林房雄と中条百合子の対立について―

人生の豊饒……………岩 上 順 一…三

宮本百合子論(一)……………本多秋五…二六

『貧しき人々の群』試論……………岩 淵 宏 子…二六

小説『伸子』とその周辺……………草 部 和 子…二〇

「伸子」生誕をめぐって……………北 田 幸 恵…三〇

「『伸子』時代の日記」の一考察……………沼 沢 和 子…二七

『百合子の手紙』覚え書き―『伸子』成立前後―……………沼 沢 和 子…二七

転換点における宮本百合子……………岩 淵 宏 子…三六

―ソヴェトとの出会いと問題点―

宮本百合子 — 戦後の出発の時期の問題 — ..... 沼沢和子…二六

宮本百合子の「リアリズム」 — 『二つの庭』について ..... 滝崎安之助…二七

『道標』論 ..... 草部和子…二七

宮本百合子と民族主義の問題 ..... 和泉あき…二七

〔座談会〕「二つの庭」「道標」とインテリゲンチヤ ..... 中野重治

..... 鹿島保夫…二八

..... 草部和子…二八

..... 加藤周一

解 説

\*

—— 中野重治研究史展望 —— ..... 大塚 博…二四

—— 宮本百合子研究史展望 —— ..... 長谷川 啓…二二

中野重治研究参考文献 ..... 大塚 博…三一

宮本百合子研究参考文献 ..... 長谷川 啓…三三

## 書畫的覺悟の走りに関する芸術

小野松 二

「芸術に関する走り書畫的覺悟書」(中野重治著)——(A)  
 「芸術と無産階級」(藏原惟人著)——(B)

これらの新刊(?)に対する真正面からの批評は、今、次に述べるが如き二つの理由から許されて居る幾つかの文章は……その全体に

第一は、「こゝに集められて居る幾つかの文章は……その全体にわたつて脈絡ある訂正をしなければならなかつた。けれども私はそれをする時間を持たなかつた」(A)と、又、「本書に収められた個々の論文については、私は現在では多くの不満を持つてゐる。……しかしその全部を訂正することは出来なかつた。それはこれ等の論文を全部書き直すことを意味する」(B)と、何れもはつきりそれぞれの序文に於て断られてゐるから。それに、それを真正面から訂正することは、ただ、「だから君、ちゃんと序文で断つていたぢやないか」といふ挨拶を受取つてグウと窒息してしまふことではかないから。

然らば何故、そんなに「不満を持つてゐる」にも拘らず、そんなに「訂正しなければならなかつた」ものを敢て世に問ふたのであるか。それに対する一応の批判を拒絶することは出来なからうが、そ

れも亦ここでは許されてゐない。何故なら、これが第二の理由であるが、それは彼等の芸術觀を止揚してわれわれのそれを樹立するこゝとであつて、たとへそれを系統的に試みないとしても、優に一冊の書物を形成すべき性質のものだから。だからここでは、主として彼等の横顔の、しかもその比較的表面にあらはれた特長の、及びそれに関聯する限りの一般芸術に対する所感にとどめておきたい。

しかし、僕が敢てこんな前書をおくのは、これらに対して不真面目に向つたその逃口上ではなく、むしろ、眞面目に対してならばこそ、この前書の必要を感じたのである。たとへば、これらに「集められて居る」諸論文は何れも雑誌や新聞その他(たとへば「マルクス主義講座」)に発表されたものばかりだからその大部分はその時に読んだものであるが、僕は今それらを単に読み直したばかりでなく、たとへばこの新刊に於ては、「プロレタリアート」の「ト」の二字までが臆病にも伏字にされてゐる(Bの八四頁、及び「戦旗」三年十月号八一頁参照)有様だから僕の手許にある限りのものは、何れもそれらをそのもの形に於て読んだのである。ここに於て、この前書が単なる前書ではなく、この中に既に、これら

の新刊に對する幾らかの批評の行はれてゐることが明らかになつたと同時に、僕がさきに、「これらの新刊」の下に(9)を附したことの無駄でないこともまた明らかになつたらうと思ふ。

さて、これらを並讀して最も感興を覚えるのは、「如何に具体的に闘争するか？」(A)に對する「無産階級藝術運動の新段階」(B)から「いはゆる芸術の大衆化論の誤りについて」(A)その他を経た「解決された問題と新しい仕事」に至る、「プロレタリア藝術は大衆化されなければならない」(B)といふ命題に對する方法に關する論戰である。そこで、それがどう「解決された」かといふと、プロレタリア・イデオロギーはその盛られる器によつて規定されるものではなく、それはどんな器に盛られてもその「本来的な」点に於ては少しも変らないものだから、「労働者、農民、小市民、兵士」(B)など読者の層だけ作品の種類があつて然るべきだといふことになつて、最初から、「我々が我々の藝術を全被××民衆の残らずの部分へ持ち込むのは、それらの部分の各々の特殊性に應じてこれに追隨するのではなしに、反對に、それらの特殊性の正確な認識の上に、しかしながらそれらの特殊性に拘らぬ一定の藝術を持ち込むことにあるのだ」と叫び、「何故なら、プロレタリア藝術が形成されて行くといふことは、客觀的に見るなら、藝術の歴史の中へ、プロレタリアートが侵入することを意味する……のだから」(何れも傍点ハシは小野)と主張し続けて来た中野氏の方には、遂に軍配が上らなかつたのである。ところが、この、読者の層だけ作品の種類があつて然るべきだといふが如き理論は、プロレタリア文壇に於てはことほどさやうに珍らしい新學說なのかも知れないが、彼等の所謂ブルジョア文壇に於ては、昔から今にかけて、しかも洋の東西を問はず極

めて常識的な、單なる現実でしかない。だからここでは、そんな昔から解決されてゐる問題にいつまでも練々としてゐるべきではない、中野氏の「各々の特殊性に……追隨するのではなしに」「それらの特殊性に拘らぬ一定の藝術を持ち込むこと」によつて「藝術の歴史の中へプロレタリアート」を引上げねばならぬといふ、この苦心を問題としなければならぬ。

何故なら、読者の層だけ作品の種類をつくるが如きは何ら苦心を要しない仕事であつて、それでは、習はないイロハはいつまで経つても読めないやうに、大衆の文化的向上發展はあり得ない。極言すれば、藝術の大衆化は、読者の或る層に對してその層と同じレベルの作品を与へることが必要なのではなく、たえず一步進んだものを与へることによつて先づ大衆の藝術化をはかり、然る後にはじめて完成されるものと見なければならぬ。そしてこの問題は、その対象を中野氏の如くプロレタリアートに限らずに、それを一般の讀者大衆におく時に、更にわれわれにとつてもまた重要であるが故に、敢てここに特大筆した所以である。

これを要するに、かく中野氏が、藝術的であることが即ち大衆的であると考へたのは、つまり彼等の大衆的でないのは大衆がいけないのではなく、当時のプロレタリア作家が極めて下手くそで、少しも藝術的でないことを痛感したためであり、と同時に、中野氏自身それをやり遂げるだけの熱情と自信のあることを明らかにしたものと見なければならぬ。そして現に、尠くとも中野氏は、ひたすらにその方向に前進してゐるやうだが、然らば、一体、何のための解決ぞ。

かくの如く、理論的には解決されたかも知れないが、現実的には

少しも解決されてゐない問題を、すつかり解決されたものとして次から次へと前進してゐるのが蔵原氏の特長である。だから蔵原氏の論文は、それが極めて論理的であることは大いに認められるが、それが実に整然として居れば居るだけ、その第一前提に於て対立してゐるわれわれは、その上に建てられたすべてにもまた対立せざるを得ないのであつて、とても、ここではそれに止まつて居られない。たとへば、これを中野氏と比較すれば、中野氏は、自身作家であるためか、絶えず作家から割出してものをいつてゐる。そして中野氏は、たしかに、日本米の茶漬を常食としてゐる。それにひきかへ、蔵原氏は、果して、ひからびたゴツ／＼のロシアパンを食つてゐるのではなからうか。さもなければ中野氏が、「私は蔵原が、新しい国際的情勢の推移を更に詳細に展開すると共に、その問題に關しての日本に於ける諸条件をも併せ論じて呉れることを希望する。自明なやうに、一国(例へば日本)における闘争が国際的情勢を無視しては論じられないのに同じく、それはまた国内的情勢を無視して推論することも許されないのであるから」といふ言葉を吐く筈がない。実に蔵原氏のものからは、そこに羅列された規則や定義を、それがひとりぎめだといふ理由の下に、或は又それが現実当嵌らないといふ理由の下に一つづゝ抹殺して行つたならば、あとには、まことに、作家に役立つ何物も残らないのであつて、さればこそ、あんなに不必要な、申訳のやうな説明乃至註釈で込合つてゐるのに違ひない。だから蔵原氏の、「ロシア文学の研究者及び歴史家としての片上伸にその獨創性を許すことは困難である。その多くの場合に於て彼は獨創的な研究者と云ふよりも、寧ろロシア本国及びその他の國に於いて既に研究されたものゝ祖述者乃至は紹介者であつた。のみならずその祖述紹介が時には彼地の文献の自由なる翻訳に

過ぎない場合があつた」といふ批評は、遺憾ながら最も正確な蔵原氏自身の自叙伝でしかない。それにも拘らず、氏自身獨創的だと自負してゐるらしい口吻だが、もしさうなれば、それだけ罪が深いといはねばならぬ。しかし、だから蔵原氏が創作しないことは、たしかに、中野氏が創作することと共に、何れもおのれを知るものといへる。すでにしばしば引用した文章によつても明らかなる如く、蔵原氏のそれはまるで死んでゐる。あれで創作したならば、恐らく小林多喜二のもの以上に読み辛みに違ひない。これは蔵原氏が、科学とは又別な藝術を、「科学は分析するが藝術は綜合する。科学は抽象的であり、藝術は具象的である。科学は人間の知能に訴へ、藝術はその感性に訴へる」(ウオロンスキイ「藝術と生活」といふそれぞれの特種性を無視して、その認識が「抽象的であり、人間の感情に向つては何ものをも語らない」(ルナチャルスキー「藝術とマルクス主義」)科学でもつて律し得ると誤認したところから来てゐるのだ。それにひきかへ中野氏のそれは、まるで熱情そのものの如く生々としてゐる。だからわれわれは、ともすれば、そこに述べられてゐる思想と対立してゐるにも拘らず、その煙にいつの間にか巻き込まれてゐるのを発見する。偉大な藝術は、その芸術家と同様な読者に感動を与へる場合なんかはその教にはいらないのであつて、その芸術家とは全然別な読者までも感動させる場合に限つて、はじめて許さるべき言葉である。然らば、中野氏のこの特長は何処から来てゐるか。それは氏の「藝術について」の「三、藝術とは何か?」に於て最も明らかな如く、はつきり、ブレハノーフや、その「祖述者乃至は紹介者である」蔵原氏と対立するところにある。僕は今、その解剖に先立つて、ただ一言さし加へておきたい。

それは、中野氏が、政治的には最左翼であり得るのも、そして、

しかも芸術的には、蔵原氏などとあくまでも対立し、平然として「芸術に政治的価値なんでもはない」と豪語できるのも、いづれも、氏が、芸術と科学の区別を弁へ、芸術と政治の又別なものであることを正しく認識してゐるからに違ひないといふのである。

「さて芸術とは何か？」と中野氏ははじめる。そして、「三人の人々は、芸術の機能として、感情の組織の外に更に『思想の組織』をも加へようとする。そのことを説明するために彼等のしばしば持ち出すものは主として文学である。けれども、文学が人間の思想を組織することが事実であるとしても、それは文学の持つ、従つて一般に芸術の持つ機能の副次的な現れであり、その本来の機能である感情の組織過程の中に抽象的に認められるものであり、根本的には感情の組織の中に溶け込まれるものである。それ故、芸術の規定の中に『思想の組織』を入り込ませることは正しくないであらう」といつてゐるが、これは極めて正しい。そして、これだけ引用すれば、中野氏が如何に感情を重んじてゐるかがわかると同時に、中野氏の文章が何故いきいきしてゐるか、それがこの故だといふことも明らかだらうと思ふ。

文学の本来の機能は、かくの如く感情の組織であるが、それにも拘らず、昨今、一部の人々によつて理智が、しかも極端に重んじられて行く傾向が見える。これまた芸術と科学の区別を弁へぬものといふべきだが、これに対しては、形式主義、機械主義、理智主義、超現実主義などと共に何日か問題にするつもりである。ただここでは、われわれの芸術も亦この感情を重んじることによつて、そして大衆を芸術化させながら自らも大衆化しなければならぬことを、この機会に主張しておきたい。

しかし、中野氏は、その大衆化論と、感情説に於ては大いにわれわれにとつても継承しなければならないものがあるが、それ以上に、多くの反駁せねばならぬものを持つてゐる。それに対しては、ここで少しも触れなかつた蔵原氏に対する検討と共に、何日か試みたいと思つてゐる。

〔文学〕昭和四年二月号

## 中野重治の「鉄の話」に就いて

中 谷 孝 雄

僕は最近二つの傑れた中野重治論に接する機会を持つた。一つは、長い間の中野の友人であり同志である西沢隆二の「プロレタリア文学」八月号に於ける論文であり、他は「文芸レビュー」八月号に於ける淀野隆三の文章である。これ等二つの傑れた中野重治論は、過去数年間に於ける中野の仕事を全部的に通観し、更にその上に中野の作品（詩、小説）に対する深い理解を示してゐる。中野の全面貌はこれ等二つの論文によつて充分明かに我々の前に描きだされたのである。この上、僕が更に中野重治の全般論をするとすれば、それは明かに蛇足である。

僕は、個人的に中野と逢つたのは僅かに二三度にしかすぎない。然も、この特長の明かな人物は、僕の心に深い印象を残してゐる。だが、これ等の印象に就いては、他日又機会を見て語ることにして、今は主として彼の小説に就いてのみ語ることにする。

彼の創作集「鉄の話」を通読して、何よりも僕を驚嘆させたことは彼が極めて巧妙な話し手であることである。一度彼の言葉に捕へられると、我々は最後まで、彼の言葉に乗つて、彼の感情と共に流れ

彼と共に笑ひ共に怒り、知らず知らずの間に彼が企図したプロレタリアの感情の組織の中に引きづりこまれて仕舞ふのである。

この巧妙な説話術は、僕に二人の作家を思ひださせる。佐藤春夫と井伏鱒二である。勿論、中野のお喋りは佐藤春夫の鼻眼鏡式な氣取つたお喋りではない。井伏鱒二の道化たお喋りでも更々ない。これ等二人の巧妙なお喋り屋が、我々の心を眠らせ、我々を現実から引離して閑雅な夢の世界へつれ込まふとするのとは反対に、中野のお喋りは、地味な生地のままの地声で、我々を現実の世界——対立せる二つの階級の鬭争する世界へと導いて行く。ここでは、最早我々は閑雅な夢の中に眠つたり、逃避的なニューモアの陰に悲んではゐられない。僕等は中野と共に立ちあがらねばならない。敵は我々の眼前に毒牙をむいて突立つてゐるのだ。

中野の巧妙な説話術が最も成功してゐる小説は「鉄の話」である。「御前揮毫」なるものをキツカケに、中野は我々を元氣な地声で十五年前の北陸の農村へつれて行く。その小作人のシナボレた生活の中へ導きこむ。其処にプスプスと燻つてゐる彼等の反抗、村の小学校、地主、そして最後に圧迫された鉄の一家の北海道移民ま

で、我々の感情は作者と共に波打ちながら、農村の機構の中を一巡する。十五年が経過した。鉄は今ハッキリと「繩を誰の首にかけるか」を理解した。嘗て鉄のお袋が圧迫の底に自らを殺した繩を、鉄は今敵の首にかけなければならぬ。小説は此処で終つてゐる。そして、中野の達者な説話術は、自由自在に我々を導いて最後の一行にまで連れて来た。我々はホツとして、も一度鉄の姿をよく見やうとする。だが、既に鉄はそこにはゐないのだ。鉄のゐた場所には中野が無気な姿で立つてゐる。我々は此の巧妙な話術家にシャツポを脱ぐ。

この素晴らしい説話術は、ほとんど凡ての彼の小説に共通した特質である。僕はこの特質を単に彼の小説に於てばかりでなく、実に彼の数多くの論文に於てさえ発見するのである。だが、僕は彼の説話の魔術的方面に就いてだけ言つてゐてはいけない。彼はまた、なかなか傑出した描写力を持つた作家でもあるのだ。彼は多くの場合、その達者な話術によつてのみ小説を選んで行く。その為、彼の描写の手腕は往々おろそかになり勝である。だが、これは良くない癖だ。彼が「春さきの風」あるひは「交番前」などで示したやうな鋭い描写力を、何故彼は存分に振はうとしないのであらうか。形象がボヤケて追真感が今一段と云ふ所で、齒がゆくもとゞまつて仕舞ふ欠点を時々彼の小説が示すのは、彼があまり自分の話術にのみ信頼する為ではなからうか。僕は、この欠点が最もよく現れた小説として「砂糖の話」をあげることが出来る。僕はこの小説に於て、時に作者のお喋りをウルサクさえ感じるのである。この小説が、他の点に於ては一つの中野のアンビシアスな努力を示しながら、却つてその効果に於て失敗してゐるのは、あまりに彼が自分の長所に信頼した為の失敗に他ならない。だが、彼の小説の手法に就いてはこの位

で打切つて次に進むことにしよう。

中野の小説を、その題材の方面から分類することによつて、少しばかり中野の本質にふれてみることにする。

子供を主人公とするもの——「小僧さんの手紙」「歓迎会」「少年」及び「鉄の話」の主要部分。

女を主人公とするもの——「春さきの風」「停車場」「病気なはる」老人を主人公とするもの——「交番前」「砂糖の話」

青年を主人公とするもの——「わかもの」「花見と新聞配達夫」

右の分類によつて明かな様に、中野は実に屢々子供を主人公とする小説を書いてゐる。この他にも、彼は「春さきの風」「交番前」などの作に於ても、切迫した作者の感情を表現する場合には、子供を引つぱり出して来ることが多い。次には、彼は女と老人を多く書いてゐる。このことは、中野がその本質に於て抒情詩人であることを証明するものである。子供、女、老人等の生活は、その主要部分が感情の世界である。中野は彼の豊かな感情を、これらの人々に賦与することに、最も自由を感じるに違いない。だがこれ等の人々は現実の生活に於ては、決して一人前の役割を勤めてゐる者ではない。ここに、中野の小説に対する僕の不満がある。僕はこれ等の多くの主人公に愛を感じることは出来る。然し、彼等によつて鼓舞され激励されることは非常に少い。これは中野の過去の教養が、その抒情詩人的天分と相俟つて結果したことには違ひないが、一つには直接労働者に接する機会の少なかつたことにもよるのであらう。だが、心配はいらないのだ。素材を愛し、常に生活を叩きあげることを忘れない中野は、やがて現在に於ける僕の不満を満たして呉れるであらう。

最後に、僕は「わかもの」に就いて一言すべきである。この小説

に於て、中野は初めて闘争的な青年労働者を書いてゐる。多くの重要な問題を、きわめて解り易い言葉で、その中で説明してゐる。その限りに於て、この小説は確かに成功した作である。勿論、ここに於ても中野の古い教養が、時々ヒョククリと顔を出して、時に我々を古めかしい心境の世界へつれ込む。だが、此の作は正面から労働者の闘争的な生活を書いた所に特筆すべき価値をもつてゐる。僕は、今後の中野の作品が此の方面に於て生長し發展することを切望し期待する。

〔詩・現実〕第二冊、昭和五年九月発行

## 中野重治論

亀井勝一郎

小説の書けない小説家は、また批評の書けない批評家でもある。

中野重治は、何よりもまづ詩人であり、文芸批評家としての彼も詩人の変形にすぎず、厳密に云へばエッセイストと呼ばれるべきである。これは、歌ふべくして語らざるをえない過渡的不幸の必然に担ふ姿なのだ。何故彼は、歌ふべくして語らざるをえないのか、彼自身の告白を私は知らない。しかし、思想に憑かれた詩人、一理想のために熱狂する戦闘意志は、抒情するより以上に、露骨な論理の武器で相手を剿滅することによい魅力を感じるのではあるまいか。そして彼の論理は、体系をなさずむしろ感覚の機関銃のやうに四方八方へ放射される、謂はば性急な詩的精神のあらはれに他ならぬ。私はこの小論で、現在の（出獄後の）中野重治についてだけ語らうと思ふ。

彼は没落者・裏切者として出獄した。おそらく終生忘れ難い危機に遭遇したのであり、それを彼がいかに感じ、観察し、克服しようとして試みたか、その仕方の中に彼の全貌が浮び出てゐる筈である。これが今日彼を論ずる際の中心点とならねばならぬ。「論議と小品」の中で彼自身書いてゐる。

「僕が××の党を裏切りそれに対する人民の信頼を裏切つたといふ事実は未来にわたつて消えないのである。それだから僕は、あるひは僕らは、作家としての新生の道を第一義的生活と制作とより以外のところに置けないのである。もし僕らが、自ら呼んだ降伏の恥の社会的個人的要因の錯綜を文学的綜合の中へ肉づけすることで、文学作品として打ち出した自己批判を通じて日本の革命運動の伝統の革命的批判に加はれたならば、僕らは、その時も過去は過去としてあるのであるが、その消えぬ痣を頬に浮べたまま人間および作家としての第一義の道を進めるのである。」

（「文学者に就て」について）

この短い率直簡明な一節に、すべてのことが語られてゐるのであるまいか。いかに周密極まる神経を彼がここに使つてゐるかをみよ。戦線に赴く軍隊の指令の如く、遺書の如く、そこには無駄な只の一語すらない。いかなる説明も不要であらう。今日の中野を理解するための大切な鍵、少くともその一つは、「文学者に就てについて」の中などに最もよく現はれてゐると思ふが、この文章はまた、

彼自身にとつても、恐らく一の判然たる新生の宣言であつたのだ。以後の仕事はこの宣言の実行に他なるまい。ところで注目すべきことは、この文章は、「転向作家が転向によつて失つたのは第一義的生活であつて、第二義的、第三義的生活はまだ残されてゐると見る甘い考へ方」への抗議として書かれたものだといふことである。論戦の文章である。何故これが注目に価するのか。大部分の転向作家が、小説や感想の中で、自己の弱さ、自己の将来について告白したとき、それらは懺悔的色彩をつよく帯びがちだつた。反省と傷心とが、他に喰つてかかる強氣を喪はしめたかみにみえた。然るに中野は、いかなる場合でも独白の形式をとらず、論争の形式を用ひて自己の見解をのべた。出獄後この傾向は益々つよめられたやうに思はれる。出獄後の彼の全文章はすべてこれ論争ではないか。小説においてさへ、一二の例を除けば、その主人公の悉くは論争する主人公である。何ものかに絶えず喰つてかかつてゐる。没落と背教のどん底を描いてすら彼は争ふことを忘れぬ。そして、自分でも若干ヒステリックだと云つてゐるほど彼の論争は癪だかいものだつた。一体これは何を意味するのだらうか。

「論議と小品」をはじめ読み終つたとき私はとりあへず短気感想を書いた。僕はここに、眼ざめてゐる君のはげしい歯ぎしりを聞いた。外部に対する戦闘的言葉の背後に、僕は、君が内心において何を虐殺し尽さうと戦つたかを見た。僕の関心は君が虐殺し尽さうとしたそのものの上に注がれた。敵に対する最もはげしい挑戦の裏に、僕は、君によつて虐殺された君自身の最もはげしい哀歌を聞いた。一言で云へば、私は彼の中に没落の悲しげな表情を探しとめたのであつた。落日の美しさに陶醉することなしに夜明けを夢みることなど出来なかつたからである。尤も彼は、実に稀にしかさう

いふ表情を露骨にあらはさなかつた。それで一部の古い仲間、  
「転向」しても左翼振つてゐることに就て彼を攻撃したりした。だが自己の乱心を底ふかくおし隠してゐることは、彼の細心の決意であり、革命的慎しみ深さと若干の羞ひとハイネ的狡猾の故であると思ひ、私はやはりその影に彼のはげしい没落表情だけをみてきた。しかもあの癪だかい論争の背後にそれをみるのだ。彼の論争、ただ文学上の問題のみならず、社会のあらゆる暗黒に対して論難し挑戦する態度が激烈を極めれば極めるほど、彼の負うた手傷の深さをまざまざとみせつけられるやうな氣がする。恐らく、払ひのけても払ひのけても襲つてくる「没落」が彼を圍繞してゐるのだ。そして論争のはげしさの意味は実にかやうな危機の意識のうちにあるのだと私は思ふ。「もし僕らが、自ら招いた汚濁にもかかはらず第一義的作家として必ず生き返らうといふ固い信念とそのため努力との中で少しでも動揺したが最後、誤つた批判の鞭や文学的デカタンの勝鬨に少しでもおびえたが最後、弱氣を出したが最後、あらゆる善良な氣持と真面目さとをささげたままで二度とたてないやうな敗北の沼地へずりこんでしまはねばならぬ。」

その最後のところに、身を近づけ、最後の何ものであるかをぢかに感ずることなしにどうしてこのやうな言葉をつけるか。実に中野重治は弱氣も弱氣、大の弱虫だといふことの逆説的表現である。この内心への戦ひを、社会の暗黒と戦ふといふ仕方によつて戦ひつあるところに彼の独創があるのだ。彼が何故論理を重視するか。同一の根拠から私は理解する。小林秀雄、横光利一等反論理主義者として摘発し挑戦するのは、彼らの労作に反論理的なものがあつたかかではない、中野自ら甚しい反論理の状態を経験し、その経験の何かを知つてゐるからだ。たとへば「一つの小さい記録」をみよ。彼を

思はせる主人公は獄中で転向上申書を書きながらはつきり言っている。「私は論理的に汚れてはる自意識の——そしてさうでなければさうは感じまい——情けなさによるめいた。」と。つまり中野にとつて、非論理的であるといふことは、獄中における敗北・裏切り・没落、真理の拭ふべからざる汚濁といふ肉体的精神的苦痛以外の何ものでもなかつたのだ。その思ひ出がつきまとつて離れない。論理的であれといふことは、わかりやすさとか文章の整然とか、そんなことだけでなく、直ちに彼自身の「必らず生き返らうといふ固い」信念であり、非論理的であることは「最後」なのだ。それで彼は躍氣となるのだ。論理は、論争の方法論でなく、肉体—感覚なのだ。それを機関銃のやうに相手の胸へつるべ打ちに打ちこむのだ。だからこのいらだつた心情が表現されたとき、屢々非論理的で、感情的になるといふ逆の効果さへ生むことがある。そこが非常に美しい。尤も、やつつけられた相手にとつては、そこが非常にいやらしいに違ひない。

中野重治の最近の批評文は、重砲の弾丸のやうに、数マイルの虚空を飛び、轟然と敵の陣営に炸裂するやうな性質のものではない。むしろ即決即戦主義をとる機関銃であり、小さきみに鋭く、精巧に織細に、多分のヴァラエテと陰影と寂寥とをもつ詩精神であり、陰惨な市街戦のエッセイである。そして彼は、敗北した軍隊の最後に重傷を負ひながら尚引金からは手をはなさぬ指揮官のやうにみえる。だから私などは、彼のものを読み、自分の批評文を顧みると「論理的に汚れてはる自意識」や弱気が露骨に眼について不快になる。武装解除される前に自ら武装を解除して、荒野の上に仰向けに寝ころびながら明日がわからぬと叫んでゐるあはれな一兵卒に対し、中野の文章は厳格に親密に、「今からでもおそくはない早く原

隊に還れ」と呼びかけてゐるやうに思はれるのだ。

しかし彼自身に明日がわかるのか。明日についての理想を夢みることは出来るだらう。そのために今なさねばならぬ手近かなものから仕事を始めてゐることも事実だらう。が、結局わが身がどうなるかといふことについては何もわかるまい。只、わからないではすまされぬ感情が、日々の具体的実践に己を滅却して行く態度を越えて、漠然たる不安として常にあとへ残るのだ。これを一体いかに処置したらいいのか。中野重治は民衆を考へてゐる。現代批評家ではほとんど民衆を考へてゐるものはあるまい。一切の個人主義意識を階級意識に融合させ、自ら集団の党派の一員として働くことの中に、多分かういふ不安は解消されるのかもしれない。「必らず生き返らうといふ固い信念」は絶えずそこへぶつかつてゐる筈だ。が、信念は救済しない。「盲目」の批評において彼自ら明言してゐるやうに、「信念の現実化を諦めてゐることによつて逆に信念にすがること、信念の強さがしばしば具体的実践の放棄の口実にされかけてゐること、この信念は、信念として強くなるだけそれだけ実践の手引としての「理論」から離れて、実践から理論が「信念」として引裂かれ、そのことで信念が実践の放棄と溶け合つてゐる」ことが多い。これは正しい言葉である。だが、ここまで書けることで、彼が自身の未来を少しでも明るく感じたか。正しい言葉に自信がもてたか。

それから先はもはや私にも尚不分明な質疑の形でしか提出できない。率直に云へば、中野の革命的言説と、現実の民衆の革命的動きと、それは全く別なことではないか。彼は民衆を愛しつつ、およそ彼らと縁のない苦悩を内面に宿し、克服しようと呼叫してゐる点で全く孤独なのだ。彼は一人で叫ぶのである。この孤高はいまに始まつ